

大賞

伊具高等学校 2年 富塚 冬羽

表題「最後だとわかっていたらなら」

書籍名『最後だとわかっていたらなら』

私は、小学校六年生の時に反抗期真っ只中でした。思い返すと、今は絶対に言わないような事を言葉の意味も理解せずに、平気で親や祖母・祖父・兄妹に吐き捨てていました。

お母さんは、そんな私に一冊の本を買ってくれました。その本が「最後だとわかっていたらなら」です。今回、読書感想文を書くことになり、何の本を読もうか悩んでいた時に、思い出したのでこの本を選びました。

五年ぶりに読んだ本は、中身は変わっていないはずなのに全く別の本を読んでいるような気持ちになりました。記憶の中では、かわいいイラストが書いてあり、文字が少なく読みやすい本という印象でした。ですが、今は違います。文章全てに感動しましたが、その中で特に

感動した部分は次の言葉です。

「あなたは言わなくてもわかってきてくれていたかもしれないけど、最後だとわかっていたら一言でもいい、「あなたを愛している」とわたしは伝えただろう。」

いつも照れくさくて言えないような事ですが、もし、今日で人生が終わってしまうとしたら私は大切な人全員に、「ありがとう」、「ごめんね」、「そして「愛している」という事を伝えると思います。

お母さんは、日常的に暴言を吐いていた私に感謝する事の大切さ・弱さを認める難しさ・相手を許せる心の余裕・人を愛せる心を持てる人になってほしいという意味でこの本を買ってくれたのかもしれない。

普段は気付く事ができないような、大切な思いに気付かせてくれる深い物語でした。数えきれないたくさん本がある中、この本に巡り合うことができ良かったです。

今生きている事、大切な人がいる事、当たり前のように当たり前ではない毎日。

もし、明日が来ないとしたら皆は誰に何を伝えますか。